Ⅳ. 成果論文

① 宮里修、2022年3月、「南四国縄文晩期深鉢の型式分類と組列」『高知考古学研究』第6号、高知考古学研究会、1～26頁
② 宮里修、2022年8月、「南四国縄文晩期磨研浅鉢の分類と編年」『海南史学』第60号、高知海南史学会、1～22頁
③ 宮里修、2023年3月、「南四国出土土偶の系譜」『高知考古学研究』第7号、高知考古学研究会、1～21頁
④ 宮里修、2024年3月、「縄文・弥生移行期の南四国における異系統土器の系譜について」『高知考古学研究』第8号、高知考古学研究会、13～31頁

① 南四国縄文晩期深鉢の型式分類と組列

はじめに

居徳遺跡が提起する縄文・弥生移行期にまつわる諸問題に関心を持ち(宮里 2016・17・18・19・20)、現在は「農耕文化の波及に際する伝統文化の保持についての考古学的研究」(JSPS 科学研究費補助金 20K01075)として調査・研究に取り組んでいる。課題は多岐に亘るが、年代軸の再検討、とりわけ刻目突帯文土器とその後継についての整理は、基礎的でありながら未だ再検討の余地を多分に残している。磨研鉢については1度検討を加え基本枠を整えたが(宮里 2016)、最後段階についてはより詳細な検討を必要とする。縄文晩期土器の基本器種である深鉢と磨研鉢についてそれぞれに応じた再検討が必要な中で、本稿は深鉢の問題に取り組む[(1)]。深鉢についての主要な関心事は刻目突帯文土器であるが、先行する晩期深鉢もあわせて検討し一連の型式組列を整える。なお本稿では縄文文化伝統の保持という研究の脈絡に沿って、縄文土器の伝統をひく刻目突帯文土器を晩期深鉢の問題系に含めて考える。

1　研究史

南四国の縄文晩期深鉢は岡山を中心とした備讃瀬戸北岸域との関係が深く、さらに視野を広げると近畿との関係において年代的位置が定まる。以下に、近畿・備讃瀬戸・南四国における研究の流れ及び現状を整理する。

(1) 編年の現在

縄文時代晩期は山内清男(1937)により設定された大洞式土器を基準とする年代軸であり、大洞式土器との併行関係をもとに各地の晩期土器が検討された。西日本では近畿地方についての検討が先行して進み、近畿地方の成果を参照しながら各地域の年代的位置を探るという構図が生じた。近畿地方では宮滝遺跡(末永 1944)、橿原遺跡(末永 1961)、滋賀里遺跡(坪井 1951)の調査成果によって宮滝→滋賀里→橿原という編年観がまず整えられ、吉胡貝塚の調査成果(山内 1952)により晩期土器の新相が刻目突帯文土器であることが示された。船橋遺跡の報告(佐原 1962)により晩期末の型式として船橋式が示された後、広域編年の試みとして外山和夫(1967)による刻目突帯文土器(隆起帯土器)研究が行われ、地域ごとの変遷や併行関係が整理されるとともに、弥生土器への連絡までを視野に収めた突帯文土器の年代的位置が示された。1971年の滋賀里遺跡の発掘調査により滋賀里Ⅰ式～Ⅴ式が設定され晩期を通観する基準となった後、家根祥多(1981)により滋賀里Ⅰ式、滋賀里Ⅱ式、滋賀里Ⅲa

式、滋賀里Ⅲb式、滋賀里Ⅳ式、船橋式、長原式とつづく型式組列が詳細に整備され、現在に継承される編年の枠組みができあがった。その後、篠原中町遺跡の調査成果により滋賀里Ⅲb式が細分をふくむ篠原式として再編成され(家根 1994)、滋賀里Ⅳ式と船橋式の間に口酒井遺跡の資料が挿入され(泉 1986)、さらには磨研鉢を手掛かりとした西日本晩期土器の広域編年が整備されていった(泉 1989・90)。

南四国と関係が深い備讃瀬戸地域の晩期土器研究は、1942 年に発掘された高島黒土遺跡(岡山縣高島遺蹟調査委員會編 1955)の評価に始まる。鎌木義昌・木村幹夫(1956)が山内清男の 1951 年の口頭発表の内容をもとに、中国地方の晩期土器を黒土ＢⅠ式・福田Ｂ式と黒土ＢⅡ式に区分し、前者をアルカ属腹縁による貝殻条痕を基調とするもの、後者を口縁部下に凸帯文を伴う 1 群とした。鎌木義昌・高橋護(1965)は黒土ＢⅠ式と黒土ＢⅡ式の間に、原遺跡下層資料を晩期中葉として加え、晩期を 3 分期した。春成秀爾(1969)はひろく中国・四国の土器編年を整理するなかで岩田式、津雲下層式、福田Ｂ式、中山Ｂ式、黒土ＢⅠ式、原式、前池式、黒土ＢⅡ式、入田Ｂ式の各型式を示し、備讃瀬戸北岸域については岡山西部の黒土ＢⅠ式→黒土ＢⅡ式に対して、岡山東部の前池式を、原式に後続する、有文で突帯が普遍化した地域型式として黒土ＢⅡ式に併行させた。その後、平井勝(1988)が北房町谷尻遺跡、山陽町南方前池遺跡、倉敷市広江・浜遺跡、岡山市百間川沢田遺跡の資料を詳しく検討して、谷尻式、前池式、沢田式を設定し、刻目突帯文土器である前池式・沢田式と先行型式である谷尻式との関係を整理したことで、備讃瀬戸北岸域における年代軸ができあがった。平井は黒土ＢⅡ式を前池式と沢田式の中間に当てたが、近畿の口酒井式に相当する前池式と沢田式の間は、津島岡大遺跡3次調査の成果により津島岡大式としてより詳細な検討が加えられた(山本 1992、平井勝 1992)。津島岡大式段階は明確な型式学的特徴を見出しがたく、該当資料を挿入して間を埋める方法が試みられてきたが(平井泰男 2000、中村大 2006、濱田 2008)、小南裕一(2012)が前池式と沢田式の間に津島岡大Ⅰ段階、窪木河道1段階、津島岡大Ⅱ段階とした各資料をあて突帯文土器をⅠ～Ⅲ期に整理した研究が、最も詳細に各時期の様相を把握できる成果となっている。

南四国の晩期土器研究は、岡本健児による『高知県の考古学』(1966)や『高知県史』(1968)に始まる。近隣地域の土器型式に対応する資料を把握することから始まり、黒土ＢⅠ式、黒土ＢⅡ式に併行する土器型式として、まず八反坪遺跡、中村貝塚(中村Ⅰ・Ⅱ式)など県北部、県西部の資料が示された。その後、県中央で倉岡遺跡が調査され(岡本 1980)、西部の中村Ⅰ・Ⅱ式とも異なる、口唇刻目に特徴がある刻目突帯文土器とその先行型式の存在が知られた。これらに姫野々上町遺跡などの資料を加え、岡本健児(1983)は南四国晩期土器を晩期前半・後半に区分し最初の体系化をおこなった。晩期前半のうち初頭に位置づけられた姫野々上町資料は巻貝条痕と巻貝施文による 2 条凹線文を特徴とし、条痕深鉢と精製浅鉢の組合せに特徴がある八反坪資料が晩期前半としてつづく。晩期後半は県中央の倉岡式と県西部の中村式に区分された。倉岡Ⅰ式は口唇に刻目をもつ(波状口縁を含む)深鉢と口縁が長く延びる器形や胴部がつよく張る器形の浅鉢から構成され、倉岡Ⅱ式は口唇刻目とやや下位の刻目突帯をもち屈曲のない単純な器形をもつ条痕調整の深鉢と口頸がく字形に屈折する浅鉢から構成されるとした。倉岡Ⅱ式には刻目のない突帯(以下「素凸帯」と表記する)をもつ半精製器種があるため、素凸帯を特徴とする中村Ⅰ式と関連づけて、県西部と県中央部の土器型式が倉岡Ⅰ式→倉岡Ⅱ式・中村Ⅰ式→中村Ⅱ式という併行関係をもって推移するとした。その後は新出資料に応じた調整がつづき、北高田遺跡の資料を検討した出原恵三(2000)が北高田資料と八反坪資料・倉岡Ⅰ式をあわせて晩期中葉というひとつの時期区分を設けた。松本安紀彦(2006・08)は鴨部遺跡、栄エ田遺跡、美良布遺跡の資料を加え、近畿の編年と対照しながら編年の単位資料を配列した。上ノ村遺跡の調査成果をもとに出原(2014)は晩期前葉の土器型式を上ノ村式(1・2式)として編成した。後述の居徳遺跡をあわせて、南四国縄文晩期の各小期の指標となる資料についての認識が深まる一方で、雑多な共伴資料を編

年単位として配列する方法が型式組列の理解を阻害する側面があり、方法の見直しが必要と感じる。

本稿の重要な課題は、居徳遺跡の資料を主要な対象とする刻目突帯文土器の終焉にある。刻目突帯文土器研究における最後段階についての論点を整理しておく。刻目突帯文土器の終焉は、遠賀川式土器の登場と関わる「住み分け論」として問題化されてきた。「住み分け論」は中西靖人(1984)の議論を契機として起こり、現在もなお検討の余地を残す課題として取り組まれている。住み分け論の議論は最終段階の突帯文土器を追求する大きな動機付けとなり、近畿の年代軸が整備された1980年代以降、長原式にまつわる問題として研究が進められた(家根 1982・84、松尾 1983、中村健 1990・2008a・b、大野 1995、豆谷 2000、若林 2002、立岡 2007、中村豊 2008・16、岡田 2014・16、妹尾 2014など)。派生する議論で重要な論点となるのは水走式と播磨系の評価である。水走式は、水走(鬼虎川)遺跡8次調査Cピット貝塚(東大阪市教育委員会他編 1998)の特徴ある刻目突帯文土器で、一括性や遠賀川式土器との共存について様々な議論があるが(若林 2002、秋山 2007、豆谷 2008、岡田 2016)、長原に後続する年代的位置が認められている。一見して長原式の深鉢とは器形をはじめとする特徴が異なり、水走式の出現には今宿型、丁・柳ヶ瀬型として示された播磨系深鉢(丹治 2000、中村健 2000・08)の影響が指摘される。播磨地域で形成された特徴ある深鉢は、三谷遺跡など四国東部にも類例があり(勝浦 2000、中村豊 2008・16)、また鹿久居千軒町タイプ(平井 2000)など備讃瀬戸北岸域の刻目突帯文土器最終段階(岩見 1992、濱田 2008、小南 2012)にも認められる。これら播磨系を中心とした最後段階にまつわる問題は、南四国の刻目突帯文土器を考えるための重要な論点であり以下で詳しく取り上げる。

(2) 用語について

次章でおこなう型式分類では分類単位を「～型」と呼ぶが、背景と考え方を整理しておく。筆者は以前「考古年代学の単位が型式であることについて」(宮里 2017)において、分類と編年についての問題点を指摘した。主旨は、時期差の把握や年代単位の細分を可能とするのは「型式」として表現される、他とは違った特徴でまとまる資料群と資料群相互の関連づけであり、「一括」遺物の配列で完結する方法は型式を頼りとしながらも変化の基準である型式を覆い隠している、といったものである。では弥生土器の「様式」を縄文土器の「型式」と対比させ縄文土器型式に準拠すればよいかといえばそうではない。西日本の縄文晩期土器では粗製煮炊土器と精製盛付土器の器種分化が一般化しており、分化した器種に共通する特徴を見出して分類単位を見出す縄文土器型式の方法には馴染まない。むしろ弥生土器の「壺の形式に属するA型式」(小林 1959)のような捉え方が適する。しかしこのような断りを入れても、分類単位を「～式」と表現すれば、既往の縄文土器型式に期待される内容を備えたものと認識され、読み手の関心が齟齬と不備に向かう恐れがある。ゆえに本稿では、晩期土器を構成するある器種のうちの、他とは異なる特徴でまとまる1群とした分類単位に対し「～型」の語を用いる。この語法はすでに岡田憲一(2014・16)が実践している。岡田は「～型」の表現についての理念を説明していないが、型式学的検討における「一括性」に対し資料批判の不十分さを指摘しており(岡田 2008a)、筆者と同様の観点にたったものと推察する。筆者が別途研究にとりくんだ青銅短剣などでは(宮里 2010)「式」のなかの特殊な1群に「型」を設定しており、今回の語法を一般化することもまた困難であると考えるが、土器編年の問題点を改善するひとつの案として、本稿では「～型」の語を用いて分類単位を表現する。

2　深鉢の型式分類

既往の研究で把握された土器群を批判的に継承し、資料の観察と検討を重ねた結果、上ノ村型、先倉岡型、倉岡型、刻目突帯文の3型式、居徳型を設定するにいたった。以下に詳細を記述する。

(1) 上ノ村型

上ノ村型(第Ⅳ①-1図1～12)は土佐市上ノ村遺跡出土資料を中心とする土器型式である。晩期初頭とされた姫野々上町資料(岡本 1983)や出原(2014)による上ノ村1式に関わる土器群である。出原は上ノ村遺跡3-1-4区テラス2の資料を一括性の高い資料と評価し、無刻目突帯深鉢を重視しながら上ノ村1式を設定した。出原は口縁など細部の分類において素凸帯の形成と変化を示唆するが、本来雑多な型式を含むテラス2をひとまとまりの分類単位としている。一括遺物は器種や型式をもって分析されるべき対象であり、分析により時期幅や組合せの意味が吟味されなければならない。出原が上ノ村2式とした包含層資料は、後述の上ノ村T型の退化型と倉岡型を含んでおり、一括遺物を分析するための分類単位に見直しが必要であることを示している。

上ノ村型の深鉢は器形・胎土・調整・装飾の特徴によってまとまる1群の土器である。280点余りの事例があり、居徳遺跡、姫野々上町遺跡に少数ある他はすべて上ノ村遺跡出土資料である。器形は、底部から胴部へと直線的に開き、胴屈曲部からは器体が上方にのび、口縁が大きく外反する。最大径は口縁にあり、口径は30数cm、胴径は30cm程度である。胴屈曲部は界線により区画される。界線は巻貝を用いた凹線やヘラ描き沈線であり、複線と単線の違いがある。前後型式と比較すると複線から単線に変化したと考えられる。外反する口縁は、板状で受口を形成するものと、外面に素凸帯をめぐらすものの違いがある。板状の受口外面には2本の凹線がめぐるが、素凸帯では同箇所に沈線がなくナデ凹帯となっている。口縁内面には口縁の屈曲に応じた折込みや沈線がみられる。前後型式との関係をみると受口が素凸帯に変化したのであり、口縁内外面の線文もこれに応じて変化した。口縁には4分位置が小さく突出するものがあり、突出部の口縁外面には凹線文系の名残りとみられる凹珠文がみられる。器面調整は巻貝条痕を特徴とする。南四国には類例が乏しいが、凹線文系を継承した技法を考えられる。胴界線を境界として上下で調整が異なる場合があり、上部は下地の巻貝条痕をナデ消して仕上げるものが多い。色調は暗褐色、胎土は泥質であり、片粕式など後期土器と類似する。後続する倉岡型の灰白色・砂質とは違いが大きい。

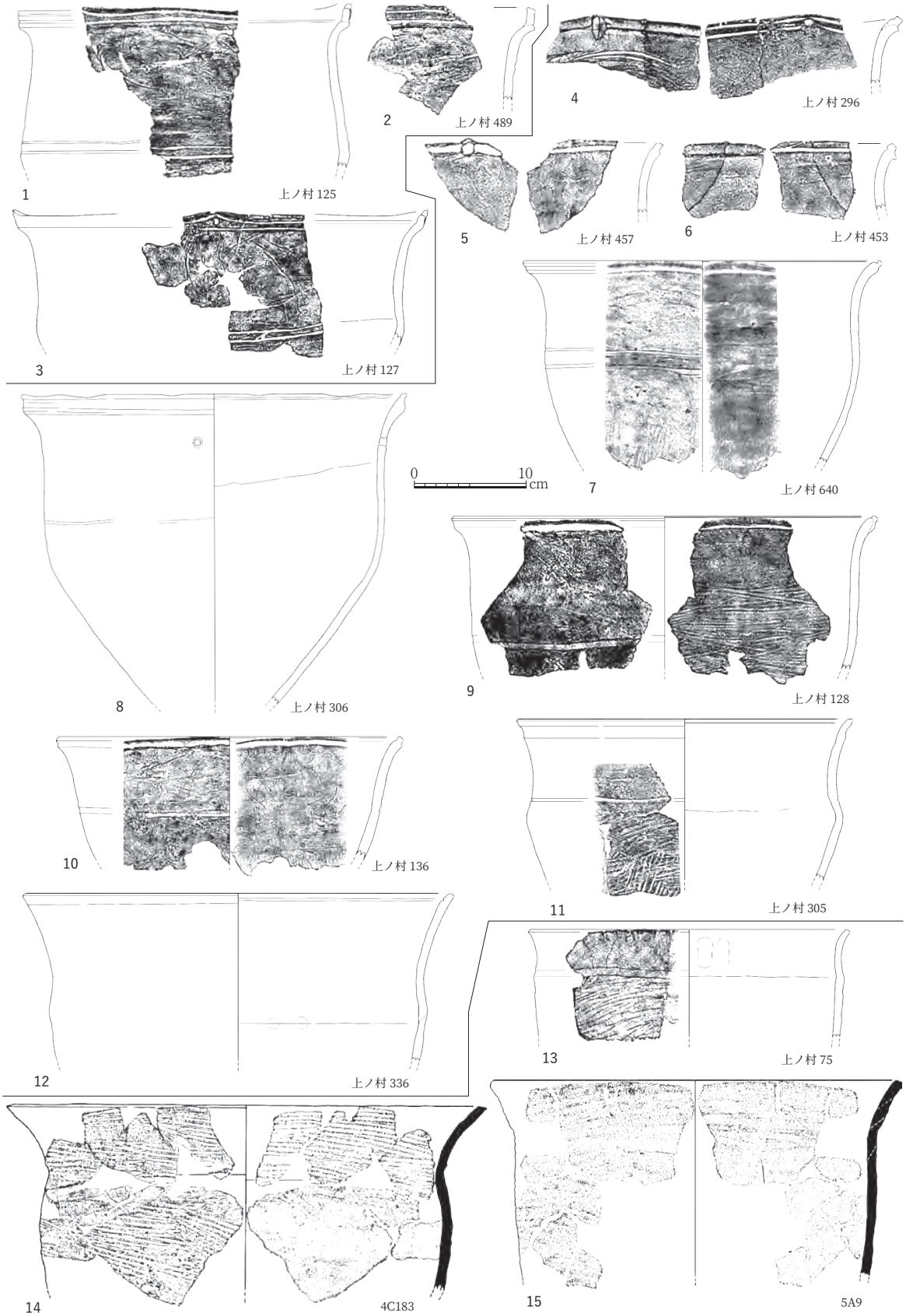
上ノ村型は後期後葉の凹線文系土器を継承し、(先)倉岡型に変化するが、口縁を中心とした特徴の違いにより先後関係となる2型式に区分できる。口縁が板状受口形のものを上ノ村U(受口)型、口縁外面に素凸帯をめぐらすものを上ノ村T(突帯)型として、以下にそれぞれの特徴を示す。

上ノ村U型

上ノ村型のうち、外反した口縁の端部に板状の粘土帯が加えられた受口状口縁のものを上ノ村U型(第Ⅳ①-1図1～3)とする。上ノ村U型は30例余りがあり、姫野々上町遺跡に1例ある他はすべて上ノ村遺跡の資料である。板状口縁部の外面には巻貝で施文された2条の凹線がめぐる。凹線にはヘラで施文された片切彫り状のものもある(第Ⅳ①-1図2)。波状口縁の資料では波頂部外面に珠文が加わる。珠文には巴状に端部がのびるものもある(第Ⅳ①-1図3)。受口部の下端が鋭く突出するもの(第Ⅳ①-1図2)があり、素凸帯の成因となる。口縁内面の受口屈折部には接合時の調整で生じた微弱な凹線がめぐる。胴屈曲部には巻貝で施文された2条の凹線が界線としてめぐる。外面は巻貝条痕で調整され、胴界線より上部は下地の条痕をナデ消して仕上げられる。

上ノ村T型

上ノ村型のうち、外反する口縁外面に素凸帯がめぐるものを上ノ村T型(第Ⅳ①-1図4～12)とする。上ノ村T型には130点余りがあり、上ノ村遺跡が多数を占めるほか、居徳遺跡、姫野々上町遺跡にも類例がある。上ノ村T型の素凸帯は上ノ村U型の受口状口縁下端の稜が転化したものである。上ノ村U型の口縁外面2条線は省略され、素凸帯上端のナデつけにともなう1条の凹帯となる。口縁内面には上ノ村U型の口縁屈折部凹線の痕跡として、片切彫り状の凹線もしくは段がめぐる。上ノ村T型



第Ⅳ①－１図　上ノ村型
（上ノ村Ｕ型：1～3、上ノ村Ｔ型：4～12、先倉岡型）

にみられる口縁外面の珠文(第Ⅳ①-1図4・5)や口縁内面に転写された2条線と珠文(第Ⅳ①-1図4)も上ノ村U型から略化継承したものである。胴屈曲部の巻貝施文による界線には2条(第Ⅳ①-1図7)と1条(第Ⅳ①-1図8～11)があり、上ノ村U型の2条を継承しつつ上ノ村T型で1条凹線が定型化したとみられる。また上ノ村T型には特徴的な退化形態もみられ、素凸帯が痕跡化しナデ凹帯(第Ⅳ①-1図11·12)となったものや、胴界線が痕跡化しミガキ段(第Ⅳ①-1図11)やナデ凹帯(第Ⅳ①-1図12)となったものがある。器形にも連動した変化があり、胴屈曲部からやや窄まったあと口頸部が外反して開くものに変わる。胴界線より下部を2枚貝条痕で仕上げるものもみられ、(先)倉岡型への移行が窺える。退化型の資料は上ノ村遺跡の8例ほどであるが、まとまった資料が得られれば一分類単位とすべき対象である。

(2) 先倉岡型・倉岡型

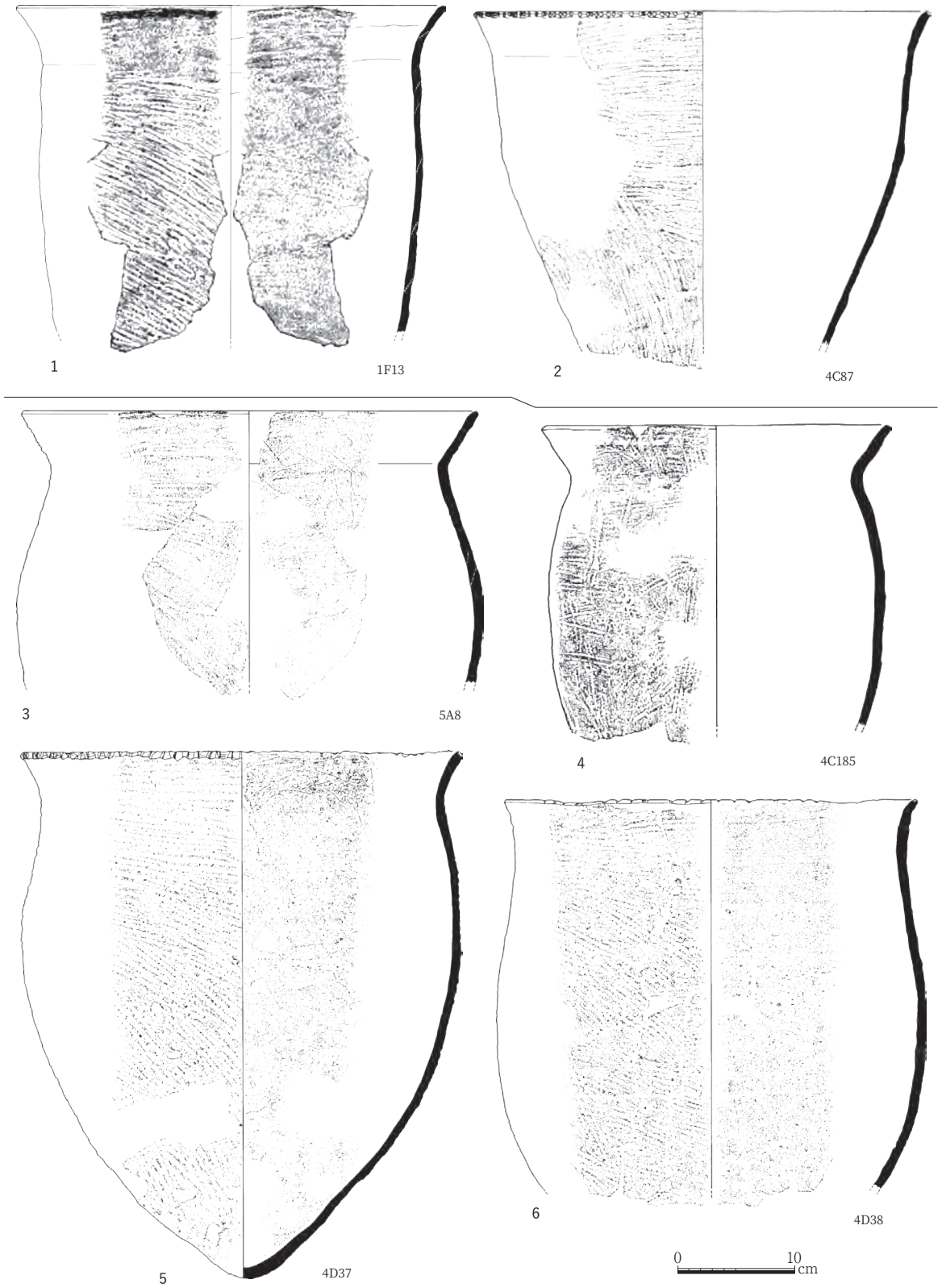
倉岡型は岡本(1983)の倉岡Ⅰ式に相当するもので、刻目突帯文土器の再編にともない倉岡Ⅱ式を廃することから倉岡Ⅰ式を倉岡型深鉢として再定義する。倉岡型は、張りのある胴部から頸がすぼまり口縁が外反する器形と、全体を2枚貝条痕で仕上げる器面調整に特徴がある。倉岡Ⅰ式では口唇刻目も特徴とされたが、1,060点ほどある倉岡型のうち[(2)]600点以上が口唇に刻目を持たない。胴部最大径は30cm台後半のものが多く、前後型式と比べ大型である。倉岡型に準じる土器のうちには、倉岡型一般の特徴からやや外れ上ノ村T型との関係が考慮される1群がある。資料数は50点ほどであるが特徴的な1群として析出できるため、倉岡型の原型式となる先倉岡型として分類単位を設定する。類例の増加にあわせて改めて型式名を付したい。

先倉岡型

先倉岡型(第Ⅳ①-1図13～15、第Ⅳ①-2図1・2)は上ノ村T型の口頸部が短くなった器形をもつ。胴部の張りは小さく、口縁部は屈折気味に折れ外傾する。胴と口縁部の境界にナデ凹帯(第Ⅳ①-1図13～15)をめぐらし部位を区分する。ナデ凹帯を欠く場合も口縁部の2枚貝条痕をナデ消すことで部位を区分する(第Ⅳ①-2図1)。口縁部は胴部よりもやや厚めにつくる傾向があり、ナデ凹帯や肥厚による口縁部の区分は滋賀里Ⅲa式に通じる特徴といえる(家根 1981、岡田 2011)。居徳遺跡や上ノ村遺跡を中心に52点が確認され八田奈呂遺跡にも類例がある。

倉岡型

倉岡型(第Ⅳ①-2図3～6)は前述のように、張りのある胴部から頸が窄まり口縁が外反する器形と全面2枚貝条痕を特徴とする。先倉岡型と比べると、ナデ凹帯や調整区分がなくなり胴部と口縁の区別が曖昧になっている。また口縁部に最大径があった先倉岡型に対し、胴部の張りが強くなった倉岡型は口径と胴最大径が同程度となる。器形の変化に、上ノ村T型から先倉岡型を経て倉岡型にいたる連続性を読み取ることができる。倉岡型の口縁部の折れには特徴的な2種類があり、屈折タイプ(第Ⅳ①-2図3·4)と屈曲タイプ(第Ⅳ①-2図5·6)に区分される。口縁の折れ形状が確認できた127点のうち、屈折タイプは21点、屈曲タイプは106点であった。先行する先倉岡型が屈折形で、後続する刻目突帯文土器が屈曲形であるから、倉岡型においては屈折タイプが先行し、屈曲タイプが後行すると考えられる。前述のように倉岡型全体としては口唇刻目の割合が低いが、口唇刻目と折れ形状の相関をみると、屈折タイプは14%、屈曲タイプは40%に口唇刻目があり、施文率は増加傾向を示す。倉岡型で底部が遺存する資料をみると、尖り気味の丸底と上げ底気味の平底の2種類がある。先行型式の底部形状は不明であるが、後続する刻目突帯文土器にかけて平底に統一化されれていくとみられる。倉岡型には1,060点余りの資料があり、居徳遺跡や上ノ村遺跡(さらに倉岡遺跡)を中心に、栄エ田遺跡、北高田遺跡、新改小山田遺跡、柳田遺跡、林田シタノヂ遺跡ほか、多くの遺跡から出土している。南四国の縄文晩期深鉢では数量および出土遺跡数がもっとも多い型式である(宮里 2020)。



第Ⅳ①－２図　先倉岡型・倉岡型深鉢
（先倉岡型：1・2、倉岡型：3～6）

(3) 刻目突帯文土器

県中央部の刻目突帯文土器は倉岡Ⅱ式とされ、口唇に刻目をもつ突帯文土器として西部の中村Ⅱ式と対置されたが(岡本 1983)、その後の出土資料により明らかとなった刻目突帯文土器の多様性を倉岡Ⅱ式によって包括するのは困難であるため、刻目突帯文土器という大別を維持しながら新たな細別型式を設定する。

刻目突帯文土器には器形を主な違いとする3種類があり、細部も器形に応じて異なった特徴を示す。器形の違いは口頸部において顕著であり、各特徴に応じて短頸型、喇叭型、長頸型と区分することができる。いずれも備讃瀬戸北岸域と関係の深い器形である。出土遺跡は高知平野に集中し、胴が屈折する器形において九州と結びつく西部の中村Ⅱ式と顕著な地域差を示す。該当資料は14遺跡から720点ほどが出土している。出土遺跡には上ノ村遺跡、新改小山田遺跡、仁井田遺跡、栄エ田遺跡、松ノ木遺跡、柳田遺跡、北高田遺跡、八田神母谷遺跡、八田奈呂遺跡、西鴨地遺跡、天崎遺跡、林口遺跡、林田シタノヂ遺跡などがあるが、出土遺物の87％を占める居徳遺跡への集中が顕著である。居徳遺跡への集中傾向は型式変化の進行とともにさらに顕著となっていく。

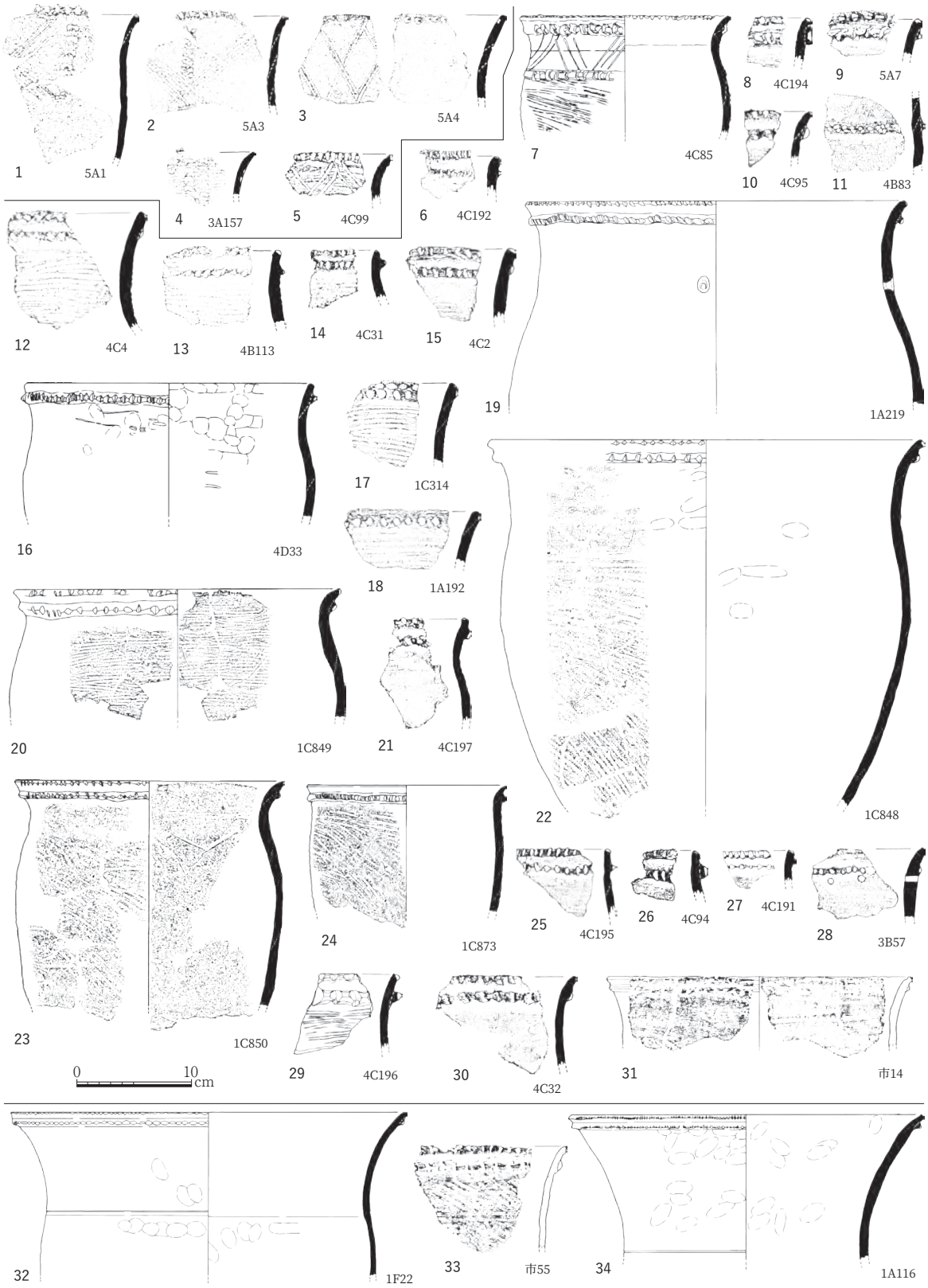
器形によって区分される3型式は時期差の関係にあり、短頸型、喇叭型、長頸型の順に推移する。資料の大部分を居徳遺跡が占めるため標式遺跡に基づく命名が困難であり、また将来的には短頸型と喇叭型の間に1型式が見出される可能性が高いため記号化も避けたい。よって暫定的ではあるが、形態差の表現である「短頸型」「喇叭型」「長頸型」を型式名とし、今後良好な資料の発見があれば適宜型式名を付与することとする。細別3型式の名称は「刻目突帯文短頸型（以下、表記は「刻凸短頸型」とする）」「刻目突帯文喇叭型（「刻凸喇叭型」と表記する）」「刻目突帯文長頸型（「刻凸長頸型」と表記する）」となる。3型式は次の特徴で端的に区分される。「刻凸短頸型」は口頸部が短く、また開きも小さく、厚手で、突帯・刻目ともに大振りである。「刻凸喇叭型」は口頸が大きく開き、薄手で、突帯・刻目ともに小振りである。「刻凸長頸型」は長い口頸部が肩から外反するが開きが小さく、下がった位置につく口縁突帯は幅狭で薄く、刻目も小さい。以下に、各型式の内容を詳述する。

刻凸短頸型

刻凸短頸型（第Ⅳ①-3図8～10･12～31）は、胴最大径から短い口頸部がゆるく開く器形を特徴とする。口縁の外反は小さく、口径と胴最大径は同程度か胴最大径がやや大きい、倉岡型屈曲タイプと類似した器形である。器壁に厚みがあることも倉岡型に似る。刻凸短頸型の236点について口唇部の調整をみると、丸く収めたものが114点であるのに対し、何らかの面取りを施したものが91点、他に尖り気味のものが26点である。また口唇に刻目をもつ133点に対し、無刻みは94点で、倉岡型屈曲タイプよりさらに口唇刻みの施文率が上がっている。また口唇刻目には、外反した口唇刻目が見かけ上は刻目突帯にみえる擬2連突帯（後述）もある。器面調整は2枚貝条痕を基調とし倉岡型の技法を継承するが、口頸部は条痕をナデ消して仕上げており、部位の仕上げを違えて区分する手法をとる。刻凸短頸型の突帯は幅がひろく厚みのあるものが多く、刻みも大きく深いものが目立つ。刻目には半裁竹管状の、先端が2叉に分かれた刳込みの浅い工具を押し引いて施文したC形のものがあり、備讃瀬戸北岸域の前池式に通じる。刻凸短頸型は、居徳遺跡をはじめ上ノ村遺跡、新改小山田遺跡、仁井田遺跡、栄エ田遺跡、松ノ木遺跡、柳田遺跡、北高田遺跡、八田神母谷遺跡、西鴨地遺跡、天崎遺跡、林口遺跡、林田シタノヂ遺跡の13遺跡から236点が出土しており、各遺跡で倉岡型の延長線上に刻凸短頸型が成立したことを示している。

刻凸喇叭型

刻凸喇叭型（第Ⅳ①-3図32～34、第Ⅳ①-4図1～9・11・12・29～32他）は、胴最大径からやや頸を窄めつつ口縁部が大きく外反して開く器形を特徴とする。最大径は口縁部にある。口頸部と胴部の境に界線を施すことを重要な特徴とする。界線は1条で、ヘラ描き沈線やナデ・ミガキによる凹線があるが全体に沈線が多い。胴部突帯をもつものが17点あるが、全体に占める割合は僅少であり、界線に準じる区画文様として加えられたと考えられる。界線を境界に上下で仕上げの調整が異なり、刻凸短頸型の調整方法を継承している。界線上の口頸部はナデで丁寧に仕上げ、界線下はケズリや繊維状擦痕などで粗く仕上げたものが多い。器壁が薄く、雲母を含む精選された胎土を用いたものが目立つ。口縁および胴部をめぐる突帯は細く低平なものが多く、刻目は小さく、あるいは細く浅い傾向にある。一



第Ⅳ①－３図　刻凸短頸型・刻凸喇叭型深鉢と関連資料

（刻凸短頸型：8～10・12～31、刻凸喇叭型：32～34、谷尻式：1～5、前池式：6・7・11）

〔C刻：1～4・6～12・15・18・20・28・29・30、擬２連凸：19・20・22・23・29・32～34〕

部には厚手で造形が粗略なもの（第Ⅳ①-4図31・32）もあり刻凸喇叭型における時期差を示す可能性がある。口唇が遺存する317点のうち刻目をもつものは169点である。刻目突帯の諸形態のうち端接突帯、垂下突帯、擬２連突帯があり、擬２連突帯には２連突帯の効果をつよく意図したものがある（後

述)。器形や刻目突帯の特徴は備讃瀬戸北岸域の沢田式に類似し、両型式の接点を示す。刻凸喇叭型には341例があり松ノ木遺跡、上ノ村遺跡、新改小山田遺跡、仁井田遺跡、八田神母谷遺跡、八田奈呂遺跡に17例ある他はすべて居徳遺跡から出土した。

刻凸長頸型

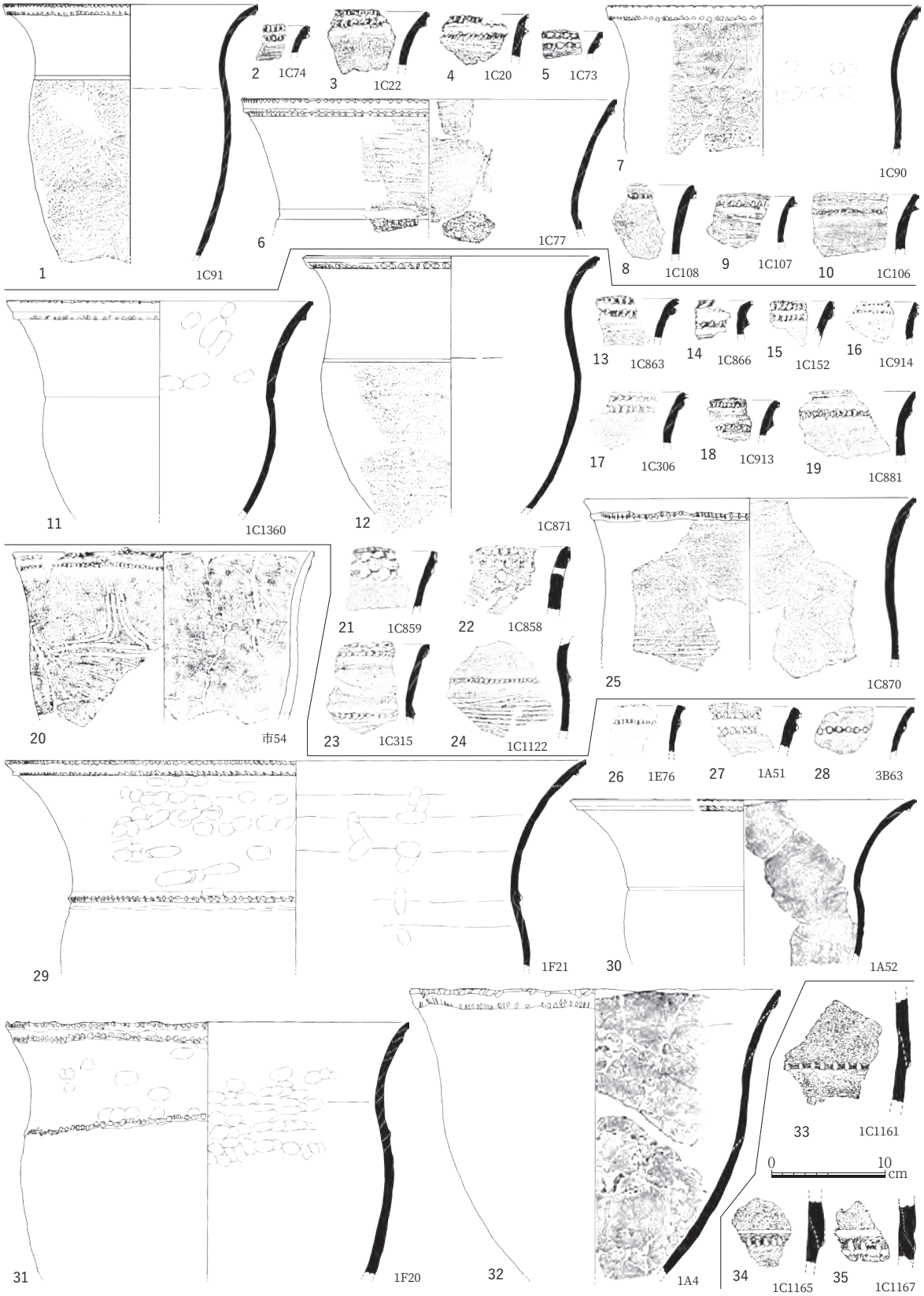
刻凸長頸型(第Ⅳ①-4図10・15～28、第Ⅳ①-5図1～14)は、胴最大径から長い口頸部が緩やかに外反する器形を特徴とする。最大径は口縁部にあるが喇叭型にくらべ開きは小さい。口唇から下がった位置に加えられた下位突帯を特徴とする。刻目は細く浅い。口唇が確認できた103点のうち刻目をもつものは10点で施文率の低下が著しい。器面調整は胴部が2枚貝条痕、口頸部がナデで、部位により仕上げが異なる。多くは喇叭型の特徴であった界線を欠くが、口頸部に文様をもつものには胴部突帯が加えられる。

刻凸長頸型は「服部型」の影響を受け成立したと考えられる。本稿で設定する「服部型」は岡山県総社市服部遺跡(岡山県古代吉備文化財センター編 2002)の河道1出土土器(第Ⅳ①-6図5)や岡山県備前市鹿久居千軒町遺跡(日生町教育委員会編 1965)出土土器(第Ⅳ①-6図6)を標式とする、備讃瀬戸地域の深鉢型式である。外反程度の弱い長い口頸部、下位に位置する口縁部突帯、口頸部の沈線文、胴部突帯を特徴とする[(3)]。森下(2000)が讃岐地域で設定した深鉢⑤類も同類であろう。

刻凸長頸型には造形に精粗の2種類がある。服部型との類似度が高い、口縁と胴部の突帯間に文様をもつもの(第Ⅳ①-5図1～7・9～12)は、器壁が薄く、口唇の細い面取りや突帯の丁寧な接合など細部の造形が入念であり、口縁・胴部突帯への刻みも細く浅いがバラツキが小さく規格的である。文様は2本1組の縦線が一定間隔をおいて施文されるが、縦線にはヘラ描き沈線のほか幅3～6㎜の板小口を用いたものがある。備讃瀬戸地域の服部型は造形が粗略で、文様も乱雑なヘラ描き沈線を継ぎ足すように施文しており、刻凸長頸型の服部型に類するものとは製作の意識に大きな違いがある。一方で、刻凸長頸型には相対的に厚手で細部の造形が粗略なもの(第Ⅳ①-4図20・25)もあり、刻凸喇叭型以来の製作伝統が服部型の影響を受けるなかで製作意識に精粗2つの方向性が現れたといえる。また刻目突帯のうち擬2連突帯から生じた2連突帯(後述)は、器形の全体が分かる資料を欠くが本来刻凸長頸型にともなうものと考えられる。刻凸長頸型においては、下位突帯で胴界線・胴突帯をもたないもの、口頸部に文様をもつもの、2連突帯をもつものがそれぞれ分類単位として独立する可能性が高く、資料の増加を待ってのさらなる検討が必要である。刻凸長頸型には141例があり、上ノ村遺跡、八田神母谷遺跡、仁井田遺跡の3点以外はすべて居徳遺跡から出土した。

(4) 居徳型

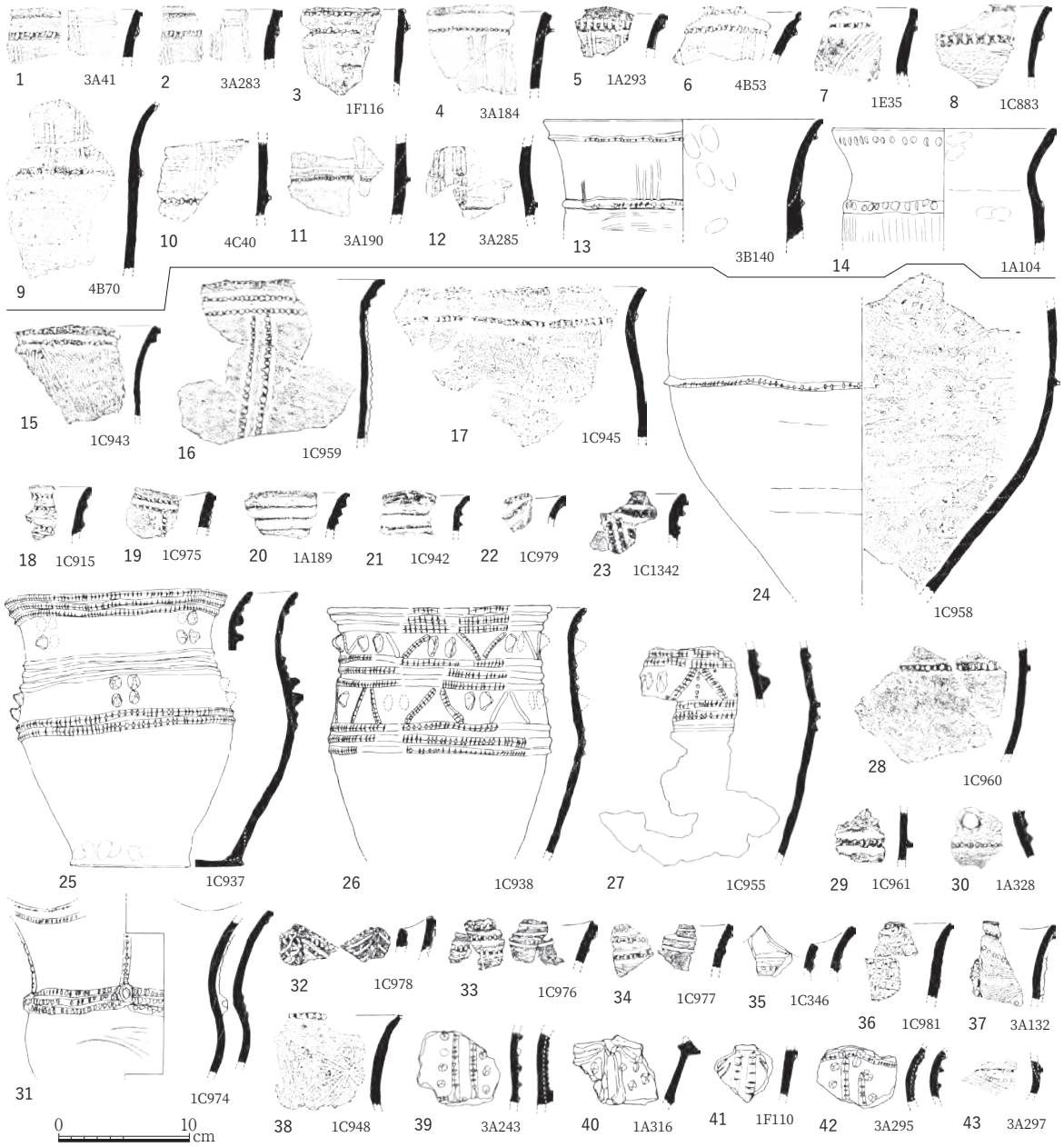
居徳型については設定済みであるが(宮里 2017・18)、刻目突帯文土器からの連続性を踏まえ、あらためて内容を整理する。居徳型(第Ⅳ①-5図15～43)に該当する資料は、現時点で居徳遺跡出土の100点余りに限られる。居徳遺跡における居徳型はまず胎土に特徴があり、特殊胎土と報告された5㎜大の細長い砂岩を一定量ふくむ1群の土器として他と区別される。特徴的な胎土により弁別された土器はいずれも深鉢で、細い突帯による装飾を特徴とする。突帯には細く浅い刻みが加えられ、大きくは刻目突帯文土器の一種といえる。居徳型は個体差が大きいが、大別すると、縦横の突帯のみのものと、突帯に浮文を加えるものに分かれる。刻凸長頸型からの系譜と、南四国型土器への連続を考えれば、突帯のみが古く(古相)、浮文の添加が新しい(新相)といえる。古相は2連突帯(第Ⅳ①-5図15)を刻凸長頸型から継承するが、2連突帯が口縁から離れたり縦の突帯が加わるなど新しい表現が現れる(第Ⅳ①-5図16)。口唇は丸く収めるものが多く、口縁には刻凸長頸型にはない屈折・屈曲傾向もみられる(第Ⅳ①-5図16・17)。居徳型の新相では、刻凸長頸型に似た器形の口縁部・口頸部中位・胴部に2条ないし3条の突帯がめぐる(第Ⅳ①-5図25～27)。細い突帯の断面は鋭い三角形で、刻みのないものもある。突帯列間には縦・斜めの刻目突帯や指で摘まみ先端を尖らせた浮文が加えられる。突帯に



第Ⅳ①－４図　刻凸喇叭型・刻凸長頸型深鉢と関連資料

（ⅣＤ層：1～10、ⅣＢ層：11～19・21～25・33～35）（刻凸喇叭型：1・6・7・11・12・29～32、刻凸長頸型：20・23～25）〔擬２連凸帯：2～5・13・14・29～31、端凸：8・9、２連突帯：15～18・21・22・26・27、垂下突帯：1・7・32、下位凸帯：10・19・20・25・28、服部型：20・23・24〕

は山形の配列（第Ⅳ①－５図26・27）や２条の縦配列（第Ⅳ①－５図39～42）があり、合間に浮文が添加される。浮文のみの場合もある（第Ⅳ①－５図25）。新相の器形には屈曲傾向（第Ⅳ①－５図25・31）と屈折傾向

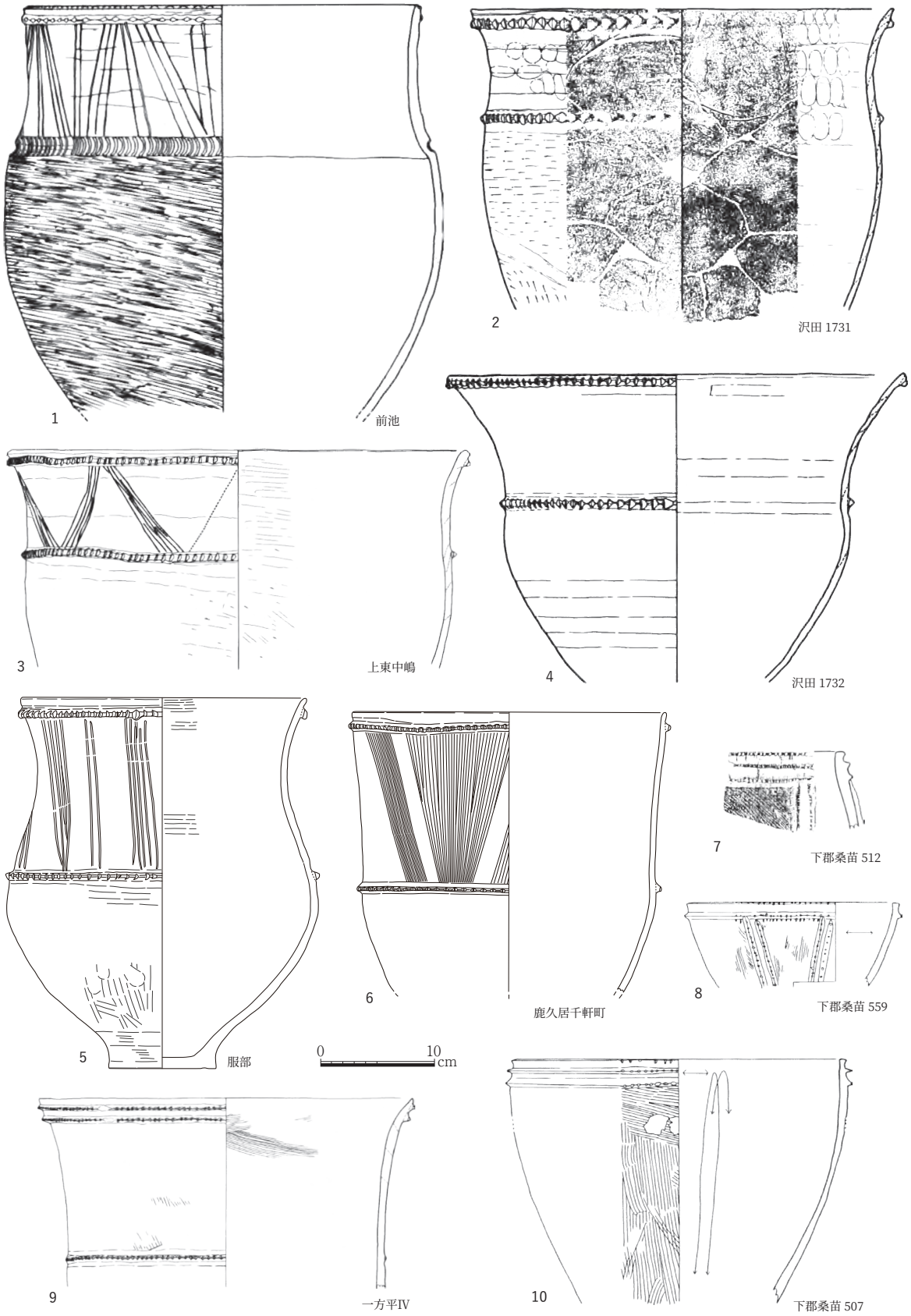


第Ⅳ①－５図　刻凸長頸型・居徳型深鉢
〔刻凸長頸型（服部型）：1～14、居徳型：15～43〕

（第Ⅳ①-５図26・27）があり、また波状口縁・平口縁の別など、古相もふくめて器形は定型化していない。突帯や集線が弧状に配されるもの（第Ⅳ①-５図32～34）や木葉文（第Ⅳ①-５図38）もあり、細部の表現も定型化していない。

(5) 刻目突帯の種類と変遷について

刻目突帯文土器の３つの型式と居徳型の刻目突帯は多系統で多様に展開する。各地の刻目突帯文土器は地域性を持ちながらも突帯の変化には共通性があり、太く厚い突帯に大きく深い刻みを加えるものから、細く薄い突帯に小さく浅い刻みを加えるものに変化し、あわせて突帯の位置も下位から口唇に接する位置に移動する。南四国の突帯もこれに準じた変化をみせるが、刻凸喇叭型以降の突帯は多様化が顕著であり、また居徳型をへて弥生中期の地域甕につながることから、特別の注意をもって突帯の変化を整理する必要がある。擬２連突帯、２連突帯、端接突帯、垂下突帯、下位突帯など各種の刻目突帯の内容を整理し、前述の型式分類と対照しながら系統と変遷を示す。



第Ⅳ①－６図　刻目突帯文土器関連資料

出現期にあたる刻凸短頸型の突帯は、幅広く厚みがあって断面が隅丸台形に近く、大きく深い刻みが加えられる。刻目の形態はＤ・Ｖ・Ｏ形など様々であるが、特徴的なのはＣ形で、半裁竹管状の、先端が２叉に分かれた刳込みの浅い工具を押し引きして施文される。倉岡型の刺突によるＣ形とは施

文方法が異なる。備讃瀬戸北岸域の前池式に通じる刻目である。刻凸短頸型から変化した刻凸喇叭型では、細く面取りした薄手の口唇部に小さな刻みを加え、口唇部からやや下がった位置に細く低い突帯をめぐらし、浅く小さな刻みを加える口縁形態が通有のものとなる。これら一般的な突帯とは別に、各型式に跨がって変化するものに「端接突帯」「垂下突帯」「擬2連突帯・2連突帯」「下位突帯」がある。

端接突帯(第Ⅳ①-4図8・9)は、突帯が口縁端部に接し口唇部と突帯上面が一体となって整形されるものである。時期とともに突帯の位置が上がる刻目突帯文土器一般の傾向に応じたものといえる。刻凸喇叭型にみられ、備讃瀬戸北岸域の沢田式に同調したとみられるが、刻凸喇叭型341点のうちの41点にとどまり主体とはならない。

垂下突帯(第Ⅳ①-4図1・7・12)は、端接突帯と同様に口縁端部に接した突帯が口唇部と一体となって整形されたものであるが、口唇部から突帯先端までが長く、突帯の断面が長三角形となる。丹治康明(2000)や中村健二(2000)が播磨地域の刻目突帯新相と位置づけた特徴に準じるもので、下位突帯の形成要因と評価された。刻凸喇叭型の6例にとどまり全体に占める割合は低い。

擬2連突帯は、刻目突帯ではありふれたものであるが、南四国においては2連突帯に変化し居徳型に取り込まれ、南四国型弥生土器につながる一連の変化の基点となる点で重要である。擬2連突帯は、土器に正対したとき外反する口唇刻目が刻目突帯と同様の装飾効果をもち、口縁突帯とともに見かけの上で2連突帯となるものを指す。刻目突帯文土器のうち口唇に刻目をもち口縁が外反するものの多くが擬2連突帯に該当する。擬2連突帯には刻目突帯文土器721点の内の182点があり、型式別では短頸型が48点、喇叭型が132点、長頸型が2点となる。口縁の外反度がつよい喇叭型に類例が多い。擬2連突帯の特徴を詳しくみると、口縁の外反によって結果的に口唇の刻目が突帯にみえるものと、口縁端部を外方に曲げたり(第Ⅳ①-4図4・13・14)、刻みを口唇部の外端に加えたりして(第Ⅳ①-4図2・3・5)、意図的に2連突帯の効果を作出したものがある。前者を擬2連突帯a(114点)、後者を擬2連突帯b(68点)とすると、擬2連突帯aは短頸型43・喇叭型69、擬2連突帯bは短頸型5・喇叭型63となり、短頸型から喇叭型にいたって2連の意識が高まったと分かる。

2連突帯(第Ⅳ①-4図15～18・21・22・26・27)は口縁端部に貼付けによる2条の刻目突帯をめぐらしたものである。擬2連突帯の口唇刻目を貼付け突帯に置き換えることで成立した。造形上は端接突帯に口縁突帯が加わったものでもあり、端接突帯が2連突帯の形成要因になったともいえる。2連突帯は器形全体を窺える資料に乏しいが、口縁の外反程度が相対的に小さいため2連突帯の41点は刻凸長頸型にともなうものと推定する。

擬2連突帯から2連突帯にいたる過程は、まず刻凸短頸型にともなって擬2連突帯aが発生し、刻凸喇叭型になって2連の意識が高まった擬2連突帯bが現れ、刻凸長頸型にいたって擬2連突帯と端接突帯が合わさり2連突帯として編成された、と整理できる。

下位突帯(第Ⅳ①-4図10・19・20・25・28、第Ⅳ①-5図1～8・13)は最後段階に現れる突帯であり、刻凸長頸型を定義づける特徴でもある。下位突帯は水走型(岡田 2016)、播磨系C類(中村健 2000)、三谷1～3類(勝浦 2000)に同調した突帯形態であり、口縁の下方に位置する細く薄い突帯に浅く小さな刻みが加えられたものである。播磨地域においては垂下突帯(A類)が下位突帯(C類)に変化したと説明された(中村健 2000)。刻凸長頸型の下位突帯は、播磨に同調した備讃瀬戸北岸域の服部型(第Ⅳ①-6図5・6)の影響を受け現れたと考えられる。

2連ないし3連の突帯をめぐらす居徳型は、刻凸長頸型の2連突帯と下位突帯の特徴を再構成して口縁端部から下がった位置に2連突帯を加えたものであり、段階的に繁縟さを増していった。

3　型式組列と系統

(1) 型式組列

上に設定した深鉢諸型式は、上ノ村Ｕ型に始まって、上ノ村Ｔ型、先倉岡型、倉岡型、刻凸短頸型、刻凸喇叭型、刻凸長頸型、居徳型へと推移した。以下に型式変化の過程を示す(第Ⅳ①-7図)。

上ノ村Ｕ型から上ノ村Ｔ型へ

南四国の凹線文系土器は有岡Ｋ式(岡本 1968)として示されたことがあるが、類例に乏しく内容が不詳であり、筆者が列挙した遺跡についても再検討の余地がある(宮里 2020)。在地での継承性は不明であるが、上ノ村Ｕ型の２条線をもつ受口状口縁は岩田第３類(潮見 1960)や御領式(水ノ江 1997、宮地 2008)、滋賀里Ⅰ式(岡田 2008b)などの時期相を継いで現れたものと考えられる。上ノ村Ｕ型は、受口状口縁の２条線がナデ凹帯となり、板状口縁下端の顎が素凸帯に転化し、内面の折れは痕跡化して凹線もしくは段となり、また胴部界線が２条から１条となって上ノ村Ｔ型へ変化した。

上ノ村Ｔ型から先倉岡型へ

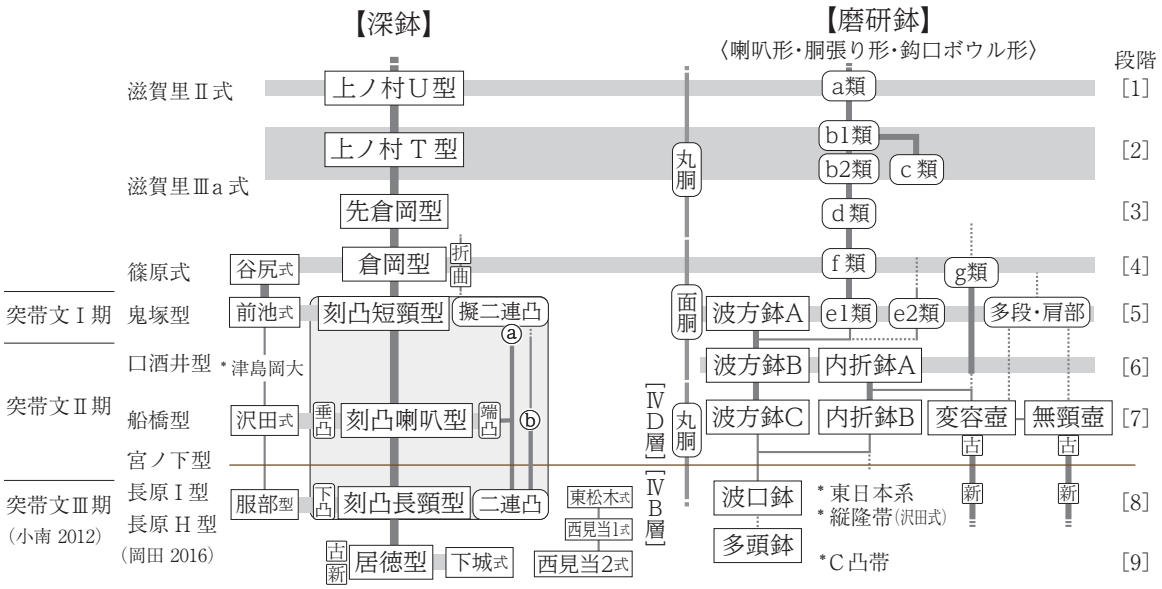
上ノ村Ｔ型を特徴づける口縁素凸帯や胴部界線などの要素が次第に痕跡化し、器面調整は巻貝条痕から２枚貝条痕へと移行して、上ノ村Ｔ型は細部の特徴が弱化した退化型に変化する。上ノ村Ｔ型の略化した長い口頸部が縮約され口縁部となり、口縁部が外折する器形へ転化すると先倉岡型が成立する。上ノ村Ｔ型ですでに痕跡化していた頸胴の区分は、口縁・胴境界の微弱なナデ凹帯や胴部(2枚貝条痕)と口縁部(ナデ)で仕上げの調整を違えることで維持・継承された。

先倉岡型から倉岡型へ

先倉岡型からナデ凹帯や仕上げ調整による口縁・胴部の区分が失われ、外面全体を２枚貝条痕で調整する仕上げとなり、胴部最大径が膨らんだ器形へと変化することで倉岡型が成立した。倉岡型の口縁部の折れは、先倉岡型を継承する屈折タイプに始まり、弛緩した屈曲タイプに変化する。口縁折れの変化にともなって口唇刻目の割合も増加する。倉岡型の底部には尖り気味の丸底と平底があり、時とともに平底へ統一されたと考えられる。

刻目突帯文土器の成立と展開

口縁屈曲タイプの倉岡型の器形を継承する刻凸短頸型は、倉岡型に突帯が加わることで成立した。



第Ⅳ①－７図　型式組列と接点

刻凸短頸型では口頸部と胴部を区分する意識が再び現れ、形態上明確な境界のない胴部と口頸部を、調整の違いにより2枚貝条痕の胴部とナデ仕上げの口頸部として区分した。

刻凸短頸型の口頸部がのび、外反の程度が増し、胴境界に界線を加えることで刻凸喇叭型が成立した。刻凸喇叭型は、倉岡型を継承し厚手傾向にあった刻凸短頸型に対し、薄手傾向が顕著で、添加される刻目突帯も細かく丁寧に作出される。短頸型と喇叭型の特徴にはやや開きがあり、いずれ中間的な型式が見出される可能性がある。

刻凸長頸型は、口頸部の開きが小さく胴界線を欠く型式として刻凸喇叭型を継ぐ。器形・下位突帯・文様・胴部突帯の特徴により備讃瀬戸地域の服部型の影響下で編成された型式である。精粗の違いや文様の有無、2連突帯の添加など在来要素、外来要素の発現差異によるさらなる細分が予見される。

居徳型の成立

居徳型は2連突帯など刻凸長頸型を継ぐが大きく変容を遂げ成立した。砂岩粒を特徴とする胎土と焼成雰囲気が土器生産の大きな変化を窺わせる。古相では器形の統一感が弱く、新相では装飾の多様化が顕著であり、定型化せぬまま構成を変転させた。居徳型につづく南四国型土器も、祖型として示されたものは多様で統一されておらず(出原 1990・2003、柴田 2000)、居徳型の延長で弥生中期の地域甕である南四国型が成立したとみられる。

なお居徳遺跡出土土器に対して実施された放射性炭素年代測定のうち、本稿の型式との対照できるものは以下の通りである(高知県文化財団埋蔵文化財センター編 2004)。

倉岡型(4C417、上半部を欠く):2990 ± 30 BP[1310-1180 cal BC(67%)]

刻凸短頸型(4D336、第Ⅳ①-3図16):2810 ± 40 BP[1050-880 cal BC(86%)]

刻凸喇叭型(1C26、擬2連突帯b、ⅣD層):2630 ± 60 BP[910-750 cal BC(78%)]

居徳型(1C958、古相、ⅣB層、第Ⅳ①-5図24):2530 ± 30 BP[720-530 cal BC(70%)]

(2) 他地域との接点

上の型式と組列を他地域と比較し、系統など位置づけを検討する(第Ⅳ①-7図)。

上ノ村U型は、受口状口縁と巻貝施文の2条線に凹線文系土器との繋がりがみられるが、滋賀里Ⅰ式・岩田第3類などの長く反り返る口縁と比べると直線的で幅も狭くなっており、型式変化が進んだものと評価できる。滋賀里Ⅱ式・岩田第4類・天城式などに対比される型式といえるが、現状では直接的な系譜関係を求めるのが困難である。

上ノ村T型は素凸帯の共通性により大分の上菅生B式(高橋 1980・83)との関連が考慮され、出原(2014)は上ノ村遺跡から及んだ影響を指摘した。近畿の編年に照らせば、滋賀里Ⅱ式に後続する滋賀里Ⅲa式との併行関係が想定され、上ノ村T型と口縁形態が類似する磨研鉢の口縁b・c類(宮里 2016)を併せてみると滋賀里Ⅲa式と上ノ村T型に時期的な接点を見出すことができる。

先倉岡型の、口縁部を胴部よりもやや厚めにつくる特徴や、口縁部と胴部をナデ凹帯や肥厚により区分する特徴は滋賀里Ⅲa式(家根 1981、岡田 2011)に通じる。すると上ノ村T型と先倉岡型の双方が滋賀里Ⅲa式と接点をもつことになり、磨研鉢を併せたさらなる検討が必要となる。

倉岡型は、滋賀里Ⅲa式につづく篠原式(家根 1994、岡田 2011)とこれに併行する谷尻式(平井 1988)、黒川式(宮地 2008)との併行関係が想定されるが、これら型式の時期は深鉢の地域性が顕著となるため直接的な形態の比較が困難となる。倉岡型のうち口縁屈曲タイプには、口頸部にC形刺突文を加えたものがあり谷尻式との接点を示す。また居徳遺跡4C区SK1では倉岡型の口縁屈曲タイプと口縁e1類・g類の磨研鉢(宮里 2016)が共伴しており、篠原式・黒川式の新しい段階と倉岡型の口縁屈曲タイプに接点があることを示す。

刻目突帯文土器は、刻凸短頸型と前池式に器形やC形刻みの共通点があり、刻凸喇叭型と沢田式に

器形の共通性が指摘できる。前池式、沢田式は近畿の鬼塚型、船橋型（岡田 2016）に併行するため（平井 1992）、口酒井型、津島岡大式に相当する型式が不在であると分かる。刻凸長頸型は備讃瀬戸地域の服部型と深い繋がりをもつ。小南（2012）は服部型にあたる土器を沢田式につづくⅢ期刻目突帯文土器と位置づけ、板付Ⅰa式につづく時期に置いている。服部型は播磨の今宿型、丁・柳ヶ瀬型（丹治 2000）の垂下突帯が下位突帯に変化する過程で成立したと考えることができ（中村健 2000）、近畿の長原型・水走型にも連絡する（岡田 2016）。刻凸長頸型は近畿や瀬戸内で遠賀川式土器が登場する前後の時期となる[(4)]。

居徳型のやや下がった位置にめぐる２連突帯や胴部に斜めの突帯を加える装飾は東九州の下城式（高橋 2000、坪根 2000）と接点をもつ（第Ⅳ①-6図7～10）。下城式甕は弥生前期後半に位置づけられるため居徳型の年代的位置も同様となる。

(3) 層位にみる時期相―居徳遺跡1C区ⅣＤ層・ⅣＢ層―

本稿が対象とした資料では時期差を考えるための層位的知見がきわめて乏しく、居徳遺跡1C区におけるⅣＤ層とⅣＢ層の区分が唯一の手掛かりとなる（高知県文化財団埋蔵文化財センター編 2002）。1C区は遺跡南部の埋没丘陵の南斜面にあたる調査区であり、土層観察用畦を残しながら刻目突帯文土器の包含層を掘削する過程で旧地表面と考えられる不整合面が検出された。不整合面より下部の植物遺体と炭化物を含む層をⅣＤ層、その上層をⅣＢ層とし、土層観察用畦においてはⅢ層の影響を受けた上部層がⅣＡ層として区分された。ⅣＤ層検出以前の出土資料はほぼⅣＢ層にあたるため、ⅣＡ層下のⅣＤ層とⅣＢ層の出土遺物を時期差として区分することが可能となった。報告書ではNo.1～148がⅣＤ層出土遺物、No.149～434・472～1310がⅣＢ層出土遺物、No.435～471がⅣＡ層出土遺物として掲載される。

ⅣＤ層には84点の深鉢（第Ⅳ①-4図1～10）があり、倉岡型22点、刻凸短頸型13点、刻凸喇叭型41点、刻凸長頸型７点で、刻凸喇叭型が多くを占める時間幅となっている。口縁部の特徴をみると擬２連突帯ｂが12点、垂下突帯２点、端接突帯10点、２連突帯４点、下位突帯３点と、刻凸喇叭型のうちで次型式に繋がる要素が多く、一部に刻凸長頸型の新しい特徴が出始めた時期と分かる。

ⅣＢ層には276点の深鉢（第Ⅳ①-4図11～19・21～25）があり、内訳は先倉岡型４点、倉岡型54点、刻凸短頸型24点、刻凸喇叭型74点、刻凸長頸型39点、居徳型75点で、刻凸長頸型では服部型に近い有文が20点、２連突帯が10点ある。服部型に近い有文、２連突帯、居徳型は新しい要素である。刻凸喇叭型でも擬２連突帯８点、垂下突帯１点、端接突帯11点、胴部突帯５点と相対的に新しい要素が目立つ。

ⅣＤ層、ⅣＢ層出土遺物の対比により、新出の刻凸長頸型が刻凸喇叭型と共存しつつ交代すること、居徳型が後出型式であることが分かる。刻凸喇叭型と刻凸長頸型の共存・交代のより詳細な実態はさらなる検討課題である（cf. 出原 2010）。

またⅣＢ層からは遠賀川式土器262点も出土している。器種には壺105点、甕137点、鉢19点、高坏１点があり、甕の型式には西見当１式が５点、西見当２式が10点ある。また甕には刻目段、直線紋刻目段、直線紋間刻目がそれぞれ確認される（第Ⅳ①-4図33～35）。居徳型と接点をもつ下城式が弥生前期後半の土器型式であり、およそ西見当２式に併行するとすれば、居徳型と西見当２式にも併行関係を認めることができる。居徳遺跡全体では弥生前期後葉の西見当２式が多数を占め、3A区からは東松木式２点（うち１点は最古形態）もあり、1C区ⅣＢ層の時間幅はほぼ弥生時代前期に相当するものとなる。刻凸長頸型から居徳型にかけての期間に、東松木式、西見当１式、西見当２式が居徳遺跡において共存したのであり、居徳型と西見当２式から遡上すれば、刻凸長頸型と東松木式に接点があった可能性も考慮される。関連する問題については磨研鉢の分析とあわせて再度検討したい。

結び

南四国の縄文晩期深鉢を再検討し、縄文晩期初頭から弥生前期後半にいたる深鉢の型式組列を示した。これにより該期の南四国における年代と系統を整理するための基本枠が整ったと考える。別途用意している磨研鉢の検討を加えることで、一層詳細な時期相の把握が可能となるであろう。時間軸に沿った遺跡分布の変遷が浮かび上がったことも本稿の成果のひとつであり、倉岡型の時期に広範囲に所在した遺跡が刻凸短頸型の時期を経て、刻凸喇叭型の時期には居徳遺跡に一極集中する様相となり、刻凸長頸型の時期にも同様の状況が継続した。また居徳遺跡 1C区ⅣB層にあたる弥生前期に、遠賀川式土器をもつ集団との関わりが次第に深まっていく様相も窺えた。さらに居徳型と東九州の下城式との関わりを示したことで、縄文文化の伝統を長く保持する居徳遺跡の背景がより具体的となり、今後の調査・研究のさらなり指針が得られたと考える。継続して取り組んでいきたい。

本稿をなすにあたり下記の方々・機関からご助言・ご助力を賜りました。記して感謝申し上げます（敬称略、順不同）。

岡田憲一、柴田昌児、谷若倫郎、出原恵三、中村豊、山崎孝盛、米田克彦

岡山県古代吉備文化財センター、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、備前市加子浦歴史文化館、

香美市教育委員会、高知県立埋蔵文化財センター、香南市文化財センター、総社市埋蔵文化財学習の館

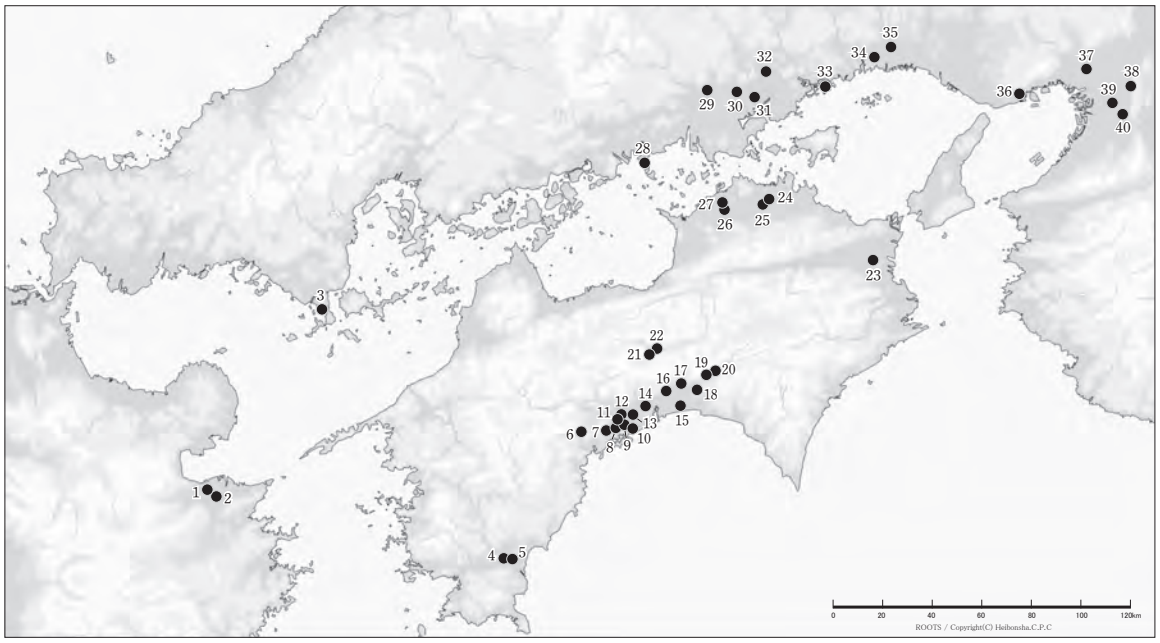
註

(1) 磨研鉢については既に論じているが（宮里 2016）、本稿を前提とした別稿を用意している。

(2) 1,300点近くの倉岡型が出土している倉岡遺跡がさらに加わる（宮里 2020）。

(3) 鹿久居千軒町の資料は、春成秀爾（1969）が未命名型式として取り上げたものであり、岩見和泰（1992）や平井泰男（2000）は、口縁部と（屈曲部のほとんどみられない）体部に刻目突帯を施して浅く軽い刻目を加え、間延びした頸部を多数の沈線で装飾することを新相の特徴と評価した。小南裕一（2012）は沢田式につづく備讃瀬戸地域のⅢ期刻目突帯文土器として、岡山平野では津島岡大Ⅲ段階、讃岐平野では川津下樋段階・多肥宮尻段階と整理した。また服部型の資料について先行する深鉢との型式学的差異が大きいと評価した。服部遺跡出土の深鉢は、底部を欠く鹿久居千軒町資料よりも遺存状況がよく、該当型式の特徴をより詳しく知ることができる。服部遺跡河道1の深鉢は器高32.6cm、復元口径25.2cm、復元胴径27.3cm、平底の底径9.4cmである。最大径のある胴から長い口頸部がいったん窄まったあとゆるく外反して開く。突帯は丸く収められた口唇部から1cm下がった位置と胴最大径から3cm上がった位置にめぐり、D形ないしV形の刻みが加えられる。口頸部の文様は、2～8本が束となった縦方向の集線文が3cmほどの間をおいて等間隔で施文される。口頸部はナデ、胴突帯の下部～最大径付近と内面の上半は横方向のヘラミガキ、胴下部は2枚貝条痕をナデ消して、底部付近はケズリ痕をナデ消して仕上げる。鹿久居千軒町資料は、口頸部の括れが弱く、突帯に加わる刻みは浅いV形やO形で、口頸部の文様は山形に連なる帯状無文部のあいだの縦長台形区画内を多数の沈線でやや乱雑に充填する。他に沢田遺跡や服部遺跡、津島岡大遺跡などの資料をみると口頸部文様はやや粗雑な集線を基調としつつ多様であると分かる。全体に突帯の接合や口唇部調整など造形の細部が雑で沢田式から略化が進んだ印象をあたえる。

(4) 森下（2000）による讃岐地域の編年では服部型に類する刻凸長頸型のあとに擬2連突帯に相当する資料がつづく。B2系譜とされた深鉢は土佐の遠賀川式土器である東松木式との関係が考慮される。今後、南四国と備讃瀬戸南岸域との関係についても検討を進めたい。



第Ⅳ①－８図　遺跡の位置

（1. 下郡桑苗、2. 一方平、3. 岩田、4. 入田、5. 中村貝塚、6. 姫野々上町、7. 西鴨地、8. 北高田、9. 倉岡・林口、10. 上ノ村、11. 居徳、12. 天崎、13. 八田神母谷・奈呂、14. 柳田、15. 田村、16. 栄エ田、17. 新改小山田、18. 林田シタノヂ、19. 美良布、20. 仁井田、21. 八反坪、22. 松ノ木、23. 三谷、24. 林・坊城、25. 多肥宮尻、26. 川津下樋、27. 下川津、28. 高島黒土、29. 服部、30. 津島岡大、31. 百間川沢田、32. 南方前池、33. 鹿久居千軒町、34. 丁・柳ヶ瀬、35. 今宿丁田、36. 大開、37. 口酒井、38. 水走、39. 長原、40. 船橋）

文献

秋山浩三、2007、『弥生大形農耕集落の研究』、青木書店

泉拓良、1986、「縄文と弥生の間に―稲作の起源と時代の画期―」『月刊歴史手帖』第14巻4号、名著出版、45～52頁

泉拓良、1989、「西日本磨研土器様式」『縄文土器大観4　後期　晩期　続縄文』、小学館、311～314頁

泉拓良、1990、「西日本凸帯文土器の編年」『文化財学報』第8集、奈良大学文学部文化財学科、55～79頁

岩見和泰、1992、「刻目突帯文土器の成立と展開」『古代吉備』第14集、古代吉備研究会、51～94頁

大野薫、1995、「紀泉の突帯文土器」『泉佐野市史研究』1号、泉佐野市史編さん委員会、3～26頁

岡田憲一、2008a 、「韓日先史土器編年のための序論―所謂有文・無文土器の転換期を中心に―」『2008년 第1回招請講演会資料』、蔚山文化財研究院、1～15頁

岡田憲一、2008b 、「凹線文系土器（宮滝式・元住吉山Ⅱ式土器）」『総覧 縄文土器』、アム・プロモーション、650～657頁

岡田憲一、2011 、「近畿地方縄文晩期土器編年と奈良県下基準資料」『重要文化財 橿原遺跡出土品の研究』橿原考古学研究所研究成果第11冊、奈良県立橿原考古学研究所、310～335頁

岡田憲一、2014 、「瀬戸内海東辺における凸帯文土器と遠賀川式土器」『中四国地域における縄文時代晩期後葉の歴史像』、第25回中四国縄文研究会徳島大会事務局、149～164頁

岡田憲一、2016 、「「凸帯文」と「遠賀川」の連接―奈良県観音寺本馬遺跡出土凸帯文土器の評価―」『魂の考古学―豆谷和之さん追悼論文集―』、豆谷和之さん追悼事業会、11～22頁

岡本健児、1966、『高知県の考古学』、吉川弘文館

岡本健児、1968、「縄文時代」『高知県史』、高知県、13～166頁

岡本健児、1980、「土佐市倉岡遺跡出土の土器群―『土佐市史』補遺―」『土佐史談』152号、土佐史談会、1～6頁

岡本健児、1983、「土佐考古学の諸問題」『高知の研究第1巻 地質・考古篇』、清文堂、95～125頁

勝浦康守、2000、「徳島の突帯文土器と遠賀川式土器―三谷遺跡・名東遺跡資料の検討―」『突帯文と遠賀川』、土器持寄会論文集刊行会、453～470頁

鎌木義昌・木村幹夫、1956、「各地域の縄文式土器 中国」『日本考古学講座第3巻 縄文文化』、河出書房、188～201頁

鎌木義昌・高橋護、1965、「瀬戸内」『日本の考古学Ⅱ　縄文時代』、河出書房新社、230～249頁

小林行雄、1959、「けいしき　形式・型式」『図解考古学辞典』、東京創元社、296～297頁

小南裕一、2012、「環瀬戸内における縄文・弥生移行期の土器研究」『山口大学考古学論集』、中村友博先生退任記念事業会、45～76頁
佐原真、1962、「縄文式土器」『船橋Ⅱ』、平安学園考古学クラブ、69～70頁
潮見浩、1960、「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」『広島大学文学部紀要』第18号、広島大学文学部、90～148頁
柴田昌児、2000、「四国西南部における弥生文化の成立過程：西南四国型甕の成立と背景」『突帯文と遠賀川』、土器持寄会論文集刊行会、381～399頁
末永雅雄、1944、『宮瀧の遺跡』奈良県史蹟名勝天然記念物調査方向第15冊、桑名文星社
末永雅雄、1961、『橿原』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第17冊、奈良県教育委員会
妹尾裕介、2014、「瀬戸内海東部における凸帯文土器の変遷と展開」『考古学研究』第61巻第1号、考古学研究会、32～51頁
高橋徹、1980、「大分県考古学の諸問題Ⅰ―刻目突帯文土器の出現とその展開について―」『大分県地方史』第98号、大分県地方史研究会、43～52頁
高橋徹、1983、「東九州における凸帯文土器とその周辺」『古文化談叢』第12集、九州古文化研究会、63～75頁
高橋徹、2000、「下城式土器の周辺」『突帯文と遠賀川』、土器持寄会論文集刊行会、273～297頁
立岡和人、2007、「『瀬戸タイプ』試論」『第8回関西縄文文化研究会　関西の突帯文土器 発表要旨集』、関西縄文文化研究会、77～87頁
丹治康明、2000、「突帯文期の地域間交流」『突帯文と遠賀川』、土器持寄会論文集刊行会、793～803頁
坪井清足、1951、「滋賀県大津市滋賀里遺跡」『日本考古学年報』第1号、日本考古学協会、65～66頁
坪根伸也、2000、「東部九州における弥生前期土器の様相―「口縁下端凸状甕」と下城式甕―」『突帯文と遠賀川』、土器持寄会論文集刊行会、255～271頁
出原恵三、1990、「「土佐型甕」の提唱とその意義」『遺跡』第32号、遺跡発行会、89～102頁
出原恵三、2000、「北高田遺跡出土の縄文晩期土器」『北高田遺跡』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第50集、92～95頁
出原恵三、2003、「「南四国型」甕の成立と背景」『続文化財学論集』、文化財学論集刊行会、77～86頁
出原恵三、2010、「弥生文化成立期の二相―田村タイプと居徳タイプ―」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間系の研究』、高知大学人文社会科学系、7～37頁
出原恵三、2014、「無刻目突帯文土器の成立と展開―上ノ村式土器の提唱とその意義―」『古文化談叢』第72集、九州古文化研究会、1～20頁
外山和夫、1967、「西日本における縄文文化終末の時期」『物質文化』第9号、物質文化研究会、15～23頁
中西靖人、1984、「前期弥生ムラの2つのタイプ」『縄文から弥生へ』、帝塚山考古学研究所、121～126頁
中村健二、1990、「近江・山城の凸帯文後半期の土器について」『滋賀文化財だより』No.144、滋賀県文化財保護協会、1～4頁
中村健二、2000、「播磨系突帯文深鉢について」『突帯文と遠賀川』、土器持寄会論文集刊行会、559～583頁
中村健二、2008a、「近畿地方の様相」『古代文化』第60巻第3号、古代学協会、107～117頁
中村健二、2008b、「凸帯文系土器（中四国・近畿・東海地方）」『総覧縄文土器』、アムプロモーション、798～805頁
中村大介、2006、「岡山平野の突帯文土器の系統と変遷」『津島岡大遺跡17―第23・24次調査―』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第22冊、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、114～123頁
中村豊、2008、「東部瀬戸内・紀伊水道沿岸地域における凸帯文土器―徳島地域を中心に―」『古代文化』第60巻第3号、古代学協会、99～106頁
中村豊、2016、「凸帯文土器と遠賀川式土器―東部瀬戸内地域の資料をもとに―」『魂の考古学―豆谷和之さん追悼論文集―』、豆谷和之さん追悼事業会、23～32頁
濱田竜彦、2008、「中国地方東部の凸帯文土器と地域性」『古代文化』第60巻第3号、古代学協会、83～98頁
春成秀爾、1969、「中国・四国」『新版考古学講座第3巻　先史文化』、雄山閣、367～384頁
平井勝、1988、「岡山における縄文晩期突帯文土器の様相」『古代吉備』第10集、古代吉備研究会、9～34頁
平井勝、1992、「弥生時代への移行」『吉備の考古学的研究（上）』、山陽新聞社、19～50頁
平井泰男、2000、「中部瀬戸内地方における縄文後期末葉から晩期の土器編年試論」『突帯文と遠賀川』、土器持寄会論文集刊行会、499～532頁
松尾信裕、1983、「長原式土器深鉢A類にみる器形の変化」『長原遺跡発掘調査報告Ⅲ』、大阪市文化財協会、193～200頁

松本安紀彦、2006、「高知平野の縄文時代晩期について―初頭を中心に・高知市鴨部遺跡の発掘調査成果から―」『高知市史研究』第4号、高知市史編さん室、14～25頁
松本安紀彦、2008、「高知県における縄文時代晩期の土器編年―前半を中心に―」『文化財学としての考古学』、泉拓良先生還暦記念事業会、173～190頁
豆谷和之、2000、「大和的凸帯文」『突帯文と遠賀川』、土器持寄会論文集刊行会、651～675頁
豆谷和之、2008、「水走遺跡第8次調査におけるCピット貝塚（第28-2層）の土器群」『文化財としての考古学』、泉拓良先生還暦記念事業会、191～204頁
水ノ江和同、1997、「北部九州の縄紋後・晩期土器―三万田式から刻目突帯文土器の直前まで―」『縄文時代』第8号、縄文時代文化研究会、73～110頁
宮里修、2010、『韓半島青銅器の起源と展開』、社会評論（韓国語）
宮里修、2016、「南四国の縄文晩期磨研浅鉢について」『海南史学』第54号、高知海南史学会、1～20頁
宮里修、2017、「居徳遺跡から縄文・弥生移行期研究を展望する―高知県における縄文時代研究の現状と課題―」『中四国縄文時代研究の現状と課題 発表要旨集』、中四国縄文研究会香川大会実行委員会、57～74頁
宮里修、2018、「晩期東日本系土器の四国・瀬戸内への波及」『中四国地方の外来系土器 発表資料集・集成資料集』、中四国縄文研究会島根大会実行委員会、33～52頁
宮里修、2019、「東松木式土器の系統と編年的位置について―南四国最古の弥生土器―」『高知考古学研究』第3号、高知考古学研究会、1～28頁
宮里修、2020、「南四国における縄文時代後・晩期遺跡の消長について」『高知考古学研究』第4号、高知考古学研究会、1～17頁
宮地聡一郎、2008、「黒色磨研土器」『総覧縄文土器』、アムプロモーション、790～797頁
森下英治、2000、「讃岐地域の突帯文系土器」『突帯文と遠賀川』、土器持寄会論文集刊行会、401～430頁
家根祥多、1981、「晩期の土器　近畿地方の土器」『縄文文化の研究第4巻　縄文土器Ⅱ』、雄山閣、142～157頁
家根祥多、1982、「第2節　縄文時代」『長原遺跡発掘調査報告書Ⅱ』、大阪市文化財協会、142～157頁
家根祥多、1984、「縄文土器から弥生土器へ」『縄文土器から弥生土器へ』、帝塚山考古学研究所、49～78頁
家根祥多、1994、「篠原式の提唱―神戸市篠原中町遺跡出土土器の検討―」『縄紋晩期前葉－中葉の広域編年』平成4年度科学研究費補助（総合A）研究成果報告書、50～139頁
山内清男、1937、「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』第1巻第1号（『先史考古学論文集(2)』、示人社、1997年に所収）
山内清男、1952、「第2トレンチ」『吉胡貝塚』埋蔵文化財発掘調査報告第1、文化財保護委員会、93～124頁
山本悦世、1992、「縄文時代晩期の土器について」『津島岡大遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、148～163頁
若林邦彦、2002、「河内湖周辺における初期弥生集落の変遷モデル」『環瀬戸内海の考古学　上巻』、古代吉備研究会、225～239頁

［報告書］

大分県教育委員会（高橋信武）編、1992、『下郡桑苗遺跡Ⅱ』大分県文化財調査報告書第89輯
大分県教育委員会（高橋信武他）編、1999、『スポーツ公園内遺跡群発掘調査報告書（第3分冊）一方平遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡』大分県文化財調査報告書第103輯
岡山県教育委員会（岡田博他）編、1985、『百間川沢田遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59
岡山県古代吉備文化財センター（大橋雅也他）編、2002、『服部遺跡、北溝手遺跡、窪木遺跡、高松田中遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告162
岡山県古代吉備文化財センター（上栫武他）編、2010、『上東中嶋遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告226
岡山縣高島遺蹟調査委員會、1955、『岡山縣笠岡市高島遺蹟調査報告』
香北町教育委員会（松本安紀彦他）編、2006、『仁井田遺跡』香北町埋蔵文化財発掘調査報告書第4集
高知県文化財団埋蔵文化財センター編、1994、『柳田遺跡』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第17集
高知県文化財団埋蔵文化財センター（松村信博他）編、1995、『栄エ田遺跡』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第22集
高知県文化財団埋蔵文化財センター（久家隆芳他）編、1998、『八田神母谷遺跡』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第32集

高知県文化財団埋蔵文化財センター（江戸秀輝他）編、1999、『八田奈呂遺跡Ⅰ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第38集
高知県文化財団埋蔵文化財センター（出原恵三他）編、2000、『北高田遺跡』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第50集
高知県文化財団埋蔵文化財センター（曽我貴行他）編、2001、『居徳遺跡群Ⅰ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第62集（1B・1C・1D区）
高知県文化財団埋蔵文化財センター（藤方正治他）編、2002、『居徳遺跡群Ⅲ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第69集（1A・1C・1DN・1F区）
高知県文化財団埋蔵文化財センター（佐竹寛他）編、2003a、『居徳遺跡群Ⅳ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第78集（1E・2A・3B・4C区）
高知県文化財団埋蔵文化財センター（松葉礼子他）編、2003b、『居徳遺跡群Ⅴ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第86集（4A・4B区）
高知県文化財団埋蔵文化財センター（曽我貴行）編、2004、『居徳遺跡群Ⅵ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第91集（5A・3A・1C・4D区）
高知県文化財団埋蔵文化財センター（出原恵三他）編、2011、『上ノ村遺跡Ⅱ』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第120集
高知市教育委員会（田上浩他）編、2002、『鴨部遺跡』高知市文化財調査報告書第23集
湖西線関係遺跡発掘調査団（田辺昭三）編、1973、『湖西線関係遺跡調査報告書』、真陽社
末永雅雄、1944、『宮瀧の遺跡』奈良県史蹟名勝天然記念物調査方向第15冊、桑名文星社
末永雅雄、1961、『橿原』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第17冊、奈良県教育委員会
坪井清足、1956、『岡山縣笠岡市髙島遺蹟調査報告』、岡山縣髙島遺蹟調査委員會
徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会（勝浦康守）編、1997、『三谷遺跡』
土佐市教育委員会（池田研）編、2015、『居徳遺跡群』土佐市埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
葉山村教育委員会編、1984、『姫野々上町・新土居宇津ヶ藪・永野遺跡』
東大阪市教育委員会・㈶東大阪市文化財協会編、1998、『水走・鬼虎川遺跡発掘調査報告書』、東大阪市教育委員会・㈶東大阪市文化財協会
日生町教育委員会編、1965、『鹿久居島の歴史』日生町文化財資料第2輯、日生町教育委員会
南方前池遺跡発掘調査団（近藤義郎）編、1995、『南方前池遺跡：縄文時代木の実貯蔵穴の発掘』、岡山県山陽町教育委員会
六甲山麓遺跡調査会・伊丹市文化財調査団（浅岡俊夫他）編、2000、『口酒井遺跡：第1次～第10次・第12次～第16次調査の概要』

［挿図出典］

第Ⅳ①－1～5図：地区・番号のみの表示はすべて居徳遺跡出土資料（高知埋文 2001・2002・2003a・b・2004）。第3・5図では資料を実見の上で一部について断面図の傾きを修正した。
第Ⅳ①－1図：「上ノ村～」は高知埋文（2011）の遺物番号に対応。
第Ⅳ①－4図：「市～」は土佐市教育委員会（2015）の遺物番号に対応。
第Ⅳ①－6図：「前池」は南方前池遺跡発掘調査団（1995）の第18図11。「沢田～」は岡山県教育委員会（1985）の遺物番号に対応。「上東中嶋」は岡山県古代吉備文化財センター（2010）の第15図32。5・6は筆者実測。「一方平」は大分県教育委員会（1999：第3分冊）の第20図3。「下郡桑苗」は大分県教育委員会（1992）の遺物番号に対応。
＊「高知埋文」は高知県文化財団埋蔵文化財センターの略